

委託研究

E S D調査研究協議会

研究主題

「所沢市のE S D」の普及

宮前小学校長	五十嵐和彦（委員長）
宮前小学校	佐藤 杏咲
西富小学校長	相川 史生（副委員長）
西富小学校	荻原 史貴
北秋津小学校長	日下 宏之
北秋津小学校	飯塚 光
山口小学校教頭	宮原 礼典
山口小学校	木下 智実
向陽中学校教頭	坪井 健
向陽中学校	本橋 千愛

指導者 学校法人湘南学園

学園長 住田 昌治

担当指導主事

鈴木 進也 佐藤 毅祐

E S D のスタートでは、まず、学校教育目標とその概念の共有が鍵になります。E S D は、子ども同士、子どもと教職員、学年や教科等を超えた教職員同士、教職員と保護者・地域、学校と行政や企業・N P O 等との連携・協働を求めているものであり、持続可能な未来を実現する学校へと変えるチャレンジでもあります。したがって、E S D をコアにしたカリキュラム・マネジメントは学校全体で取り組むものであり、学校経営と教育内容を統合的につなぎ合わせていくことでもあります。しかし、これまでは、マネジメント意識を持たず、授業をはじめとする教育活動と学校運営に関わる活動が断片的に行われてきました。そこでE S D をコアに、マネジメント意識をもって学校内外のリソースの活用を通して、授業や学校を改善し、活性化を図る日々の営みとすることが大切です。

持続可能な社会の創り手を育むために、覚えたことをはき出すような再現のための教育から、自分で問いを立て、自分で考え、自分で問題解決する変容のための教育への転換が求められます。批判的な思考力を高め、すぐに答えを求めるのではなく、急がず、ゆっくり考えて、多様な考えを尊重し合う学校文化に変えていかなければなりません。そんな学校の体質改善を行う時、授業に主体性・多様性が求められているのに、学校そのものが受け身・画一的で変わろうとしないのであれば、ますます体質は悪化します。まず大人のワクワク感が大切にされ、結果よりもプロセスを大切にする感覚が日常で共有される学校に変えていくことです。学校全体での取組は、ユネスコ等が推奨する「ホールスクール・アプローチ」で、学校全体を対象に児童生徒に寄り添いながら推し進めていく「変革」であり、旧態依然たる「学校文化」に変容を迫る過程を大切にすることです。

ホールスクール・アプローチでは、まず校長を含めた教職員らに変容し、次に子ども達に変容し、そして保護者、地域が持続可能な未来を考えるように広げていきます。(自己変容➡他者変容➡社会変容)

E S D は、教育を超えて働き方や暮らしへと眼差しを向けていくことで、個人そして組織のウェルビーイング、さらに地球のウェルビーイングを実現するS D G s 達成に貢献できるのです。

所沢市E S D 調査研究協議会の今年度の取組は、昨年度までに培ってきた実践と研究をベースとして、上記に記したホールスクール・アプローチに迫るものです。協議会委員の学校における取組の報告から得られた視点を、各学校での取組の手鏡としていただき、所沢市におけるE S D をさらに進めていただければ幸いです。所沢市E S D 調査研究協議会の12年にわたる取組は、S D G s 実現にも貢献する価値のあるものです。所沢市各校の〇〇小E S D、〇〇中E S D が実践され、持続可能な社会づくりの先駆的な取組として発展していくことを期待しています。

E S D 調査研究協議会

I 研究主題

「『所沢市のE S D』の普及」

II 研究主題について

E S D 調査研究協議会は、平成 22 年に発足し、自由学園 副学園長 成田喜一郎先生を指導者に招き、「E S D とは何か」という問いに常に向き合い、E S D の視点での授業改善を目指して調査研究を行ってきた。令和 3 年度より、前 横浜市立日枝小学校長 住田昌治先生（現 湘南学園学園長）を指導者に招き、学校づくりの視点から研究を進めている。管理職と所属校の教諭というメンバー構成により、ホールスクールアプローチを意識して研究協議会を推進してきた。特に今年度は、E S D と S D G s を関連付けながら、各校の取り組みの紹介と E S D と S D G s を身近に捉え、いかに授業実践につなげるかをテーマに「授業プロジェクトチーム」と「通信プロジェクトチーム」の 2 チームに分かれて調査研究活動を行ってきた。調査研究の成果を市内の全小中学校に発信し、学校現場における E S D や S D G s についての意識をより一層高め、各学校の実態に応じた実践により、「持続可能な社会の創り手」の育成を目指し、本研究主題を設定した。

III 研究の内容と方法

1 研究内容

協議会委員の実践事例紹介や、協議会としての活動を通じた「E S D の普及」

2 研究方法

- (1) 協議会委員の所属校における実践紹介
- (2) 協議会内プロジェクトチームによる活動
 - ① E S D 通信プロジェクトチーム
 - ア E S D 通信 N o 5 以降の発行
 - イ 立ち読み E S D の配付
 - ② E S D 授業プロジェクトチーム
 - ア 企業との連携授業について
 - イ 授業事例紹介

IV 実践

1 実践計画（報告）

	月 日	研 究 内 容	工 夫
1	5/18（水）	委嘱状交付と委員自己紹介 研究の方向性について確認	教セと指導者を Meet で接続
2	6/29（水）	指導者による基調講演 「ESD って何」	教セと委員を Meet で接続
3	7/28（木）	研究の方向性について協議 →所属校実践と、プロジェクトチーム活動を決定	教セと委員を Meet で接続

4	10/5 (水)	研究のまとめ方とプロジェクトチームごと協議 ESD 通信の発行と、企業連携授業の実施を計画	Forms を活用した 年間の日程調整
5	10/19 (水)	プロジェクトチームごとの活動について協議 立ち読み ESD の作成や、授業実践をまとめる提案	
6	11/18 (金)	研究紀要についての協議 (所属校・プロジェクトチーム) 作業を分担し、次回までに作成することを決定	Forms を活用して 委員の意見集約
7	12/26 (木)	研究紀要の完成と研究発表について 紀要原稿の統合と、研究発表内容の分担	Classroom で、 原稿共有・添削
8	1/18 (水)	研究発表について パワーポイントの作成と、予算執行について	
9	2/8 (水)	研究発表の発表動画撮影 会計報告の確認と次年度への引継ぎについて	
	2/17 (金) ～3/3 (金)	所沢市研究発表会においてオンデマンド発表	Google サイトで 研究発表
10	3/29 (水)	1 年間の振り返りと、令和 5 年度について	Meet で開催

2 実践事例

- (1) 別添資料 1 「各校での実践」 宮前小学校
西富小学校
北秋津小学校
山口小学校
向陽中学校
- (2) 別添資料 2 「プロジェクトチームの実践」 ESD 授業プロジェクト
ESD 通信プロジェクト

V 成果と課題

1 成果

○主に総合でSDGsについて触れてきました。そこから子供たちに少しずつ浸透してきているように感じます。社会科や道徳でも子供たちから「SDGsの〇番だ」と発言するようになってきました。まだまだ身近とは言いきれませんが、一歩前進したと考えます。

○ESD協議会に小学校だけでなく、中学校が参加したことで、ESDの視野が広がりました。

○授業に位置付けるESDの視点を明示したことで、授業中の意識付けにつながりました。

○プロジェクトチームを作り、作業を分担できたこと。軌道に乗ればESDを「広める」「深める」ことを計画的に実行できる枠組みになり得ると思います。

○より簡潔に内容を精査してESDについて所沢市の教職員に発信する「目に留まりやすい通信」を意識して作成することができました。

2 課題

△本格的に ESD について調査研究をしていくのなら隔月ではなく、まとまった期間と複数年での経過観察によってしっかり調査しなければならないと考えます。(例えば、研究委嘱により実施重点校のような方式で、モデル校が全校で取り組むなど)

△社会情勢を踏まえ、現場の教員のニーズと照らし合わせなければ、よい研究にならないのではないだろうか。教員や児童生徒一人一人の関心や知識量も異なるので発信は続けなければならないが、各校での研修や実践の場もタイアップしていかないと、本当の成果につながっていかないと考えます。

△学習内容が ESD と関連付いていることに気付いていない子供・教員が多いと考えます。

△ESD の認知度や、通信を読んでいるおおよその人数が把握できていれば、新たなターゲットや通信の内容の充実につなげることができると考えます。

概要

所沢市立宮前小学校の学校教育目標は「自立する子 かしく やさしく たくましく」である。自分の考えを持って行動できる「トライ&チャレンジ」が出来る児童を育成し、全児童が「学校が楽しい」と思えるような指導をしていく。取り組みは新たに授業を創造するのではなく、現在実施している授業を持続可能な社会のつくり手を育てる ESD の視点を取り入れて、児童の行動変容につなげていくことである。

実践内容

1 学校教育目標と ESD を通して育成したい資質・能力とのつながり

本校の児童に ESD を通して育成したい資質・能力は①問題解決力②持続可能な地域をつくらうとする力である。自分の生活と地域の事象にかかわる探求的な学習を通して、進んで問題解決する資質や能力を育成するとともに、自己の生き方や地域の一員としての在り方を考えることができるようにしていきたい。また、「振り返り」を通じて、学び方やものの見方・考え方を身につけ、探求的な学習に進んで取り組む態度を育てていく。

2 SDGs 達成の担い手育成 (ESD) の視点で取り組んだこと

【総合的な学習の時間における SDGs の取り組み】

(1) 環境保全

5年生は「おおたかの森」と「宮前ビオトープ」の2つを並行させて、環境保全について学習を進めている。おおたかの森では、足立さんから森を守る方法を教えていただき、次の世代に残す活動に取り組んだ。

児童に自分たちにとって最も身近な自然は何か聞くと「宮前ビオトープ」と答えた。ビオトープを見に行くとジャングルようになっていた。現在はビオトープ復活にむけて活動を進めている。



具体的には宮前ビオトープを宮前小学校の全校児童に知ってもらうため、ビオトープにいる動植物を集めたビオトープコーナー「小さな動物園を作ろう」という活動とビオトープの清掃活動の2本立てで活動を進めている。

(2) 福祉

「福祉」に関する学習を3～6年生で実施し、4年間を通じて探求的な学習を実践するとともに、豊かな情操を育む活動を進めている。各学年の学習内容は以下の通りである。

3年生：知的障害者施設「光の園」で生活する人たちの交流

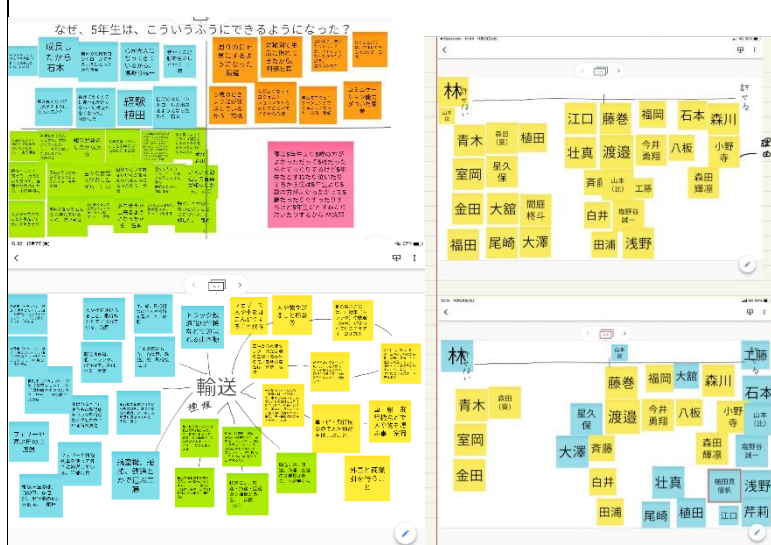
4年生：地域で生活する高齢者や障害者にとって住みよい町づくりについての学習

5年生：幼い子供たちとのかかわり方や支援の仕方についての学習

6年生：地域の福祉施設で生活する人たちや、暮らしを支援する人たちについての学習

福祉に関する学習を通して、「振り返り」を大事にし、活動の質を高め、弾力的な計画のもと学習を進めるようにしていく。

3 ESD による「変容の視覚化」の手法



道徳等の授業で自分の考えが変化していくことがわかるように、Jamboardや付箋で思考を可視化している。その考えを比較したり、整理したりすることで学びが深まり、さらに効果的に操作させることで考えの変化を捉えられるようにする。

また、黒板には児童の考えを板書したり、スクールタクトには自分の考えを入力させ、友達の意見と比較したりする時間を設けることで、考えが変わるきっかけを与えるようにしている。

4 ESD によって引き出すことができた価値

児童の思考を可視化したことで、自分の考えと同じ友達を見つけ安心したり、自分とは違う考えを持った友達がいることに気づいたりすることができた。さまざまな考えに目を向け、問題解決をしていくためにはどの考えが一番の近道になるか、ふさわしいか等も話し合い活動に取り入れている。より良い解決方法を自分たちの力で見つけ、問題解決する姿勢を育むことができた。

成果と課題

○SDGs が少しずつ浸透してきた。社会科や理科等でも児童たちから「SDGs の○番だ」と発言するようになってきている。

●学習内容が ESD と関連づいていることに気づいていない児童・教員が多い。

概要

本校の学校教育目標は「進んで学ぶ子、思いやりのある子、たくましい子」である。自主自立を重んじ、人との関わりの中から社会の参画者を目指した目標である。新たな教育活動を想像するのではなく、これまでの教育活動や現在実践している授業に、持続可能な社会のつくり手を育てる ESD の視点を取り入れて、児童の行動変容につなげていくことである。

実践内容

1 学校教育目標と ESD を通して育成したい資質・能力とのつながり

学校教育目標「進んで学ぶ子、思いやりのある子、たくましい子」の中でも、進んで学ぶ子を大切にして授業実践に取り組んだ。様々な体験や、経験を通して「わかった!」「できた!」という成功体験を積み重ねることで、学習の意欲に繋がり、児童自らが主体的に学ぼうとする態度を培うことができると考える。そのためにも授業の質の向上の一環として外部との連携を図り、普段の授業の中だけでは体験できない機会を設けることにした。さらには ESD の視点を取り入れて授業実践を行うことで、持続可能な社会のつく手として「自分には何ができるのか」など、より視野を広げて学習に取り組む児童の姿を目標に設定した。

2 SDGs 達成の担い手の育成 (ESD) の視点で取り組んだ授業

授業実践を行う上で、ESD の視点を以下の様に設定した。

- ①ジレンマを起こす問い
- ②教科の視点を繋げていく
- ④永続的な問い
- ⑤児童の行動変容に繋げる。

【授業の実際】

5 年理科「水の流れの働き」の学習では、「侵食」「運搬」「堆積」の水が流れることによって生み出される力について、体験的に学習を進めることで知識として身につけることができ、そこから生み出される新たな疑問から学習を発展させることができるのが望ましい。今回の実践では、県立川の博物館から講師を招き、学校の砂場を用いた実演の 1 時間、座学の 1 時間の合計 2 時間で知識の定着を図った。

1 時間目「水の流れにはどのような働きがあるのかな？」

砂場を利用して山から流れる川を再現した。浸食・運搬・堆積を実際に目で見るができる。



2 時間目「水の流れの働きをまとめよう！」

実験から分かったことを知識としてまとめていく。

事前の打ち合わせでハザードマップに繋がるような内容で講義を行った。



3 ESD による変容

発展「地域のハザードマップを作ろう！」

新たな発見から自分たちで何ができるのかを考えるなど、主体的に学習に取り組めた。



成果と課題

○ゲストティーチャーと連携を図ることで、準備や役割等の分担ができ、結果的に負担軽減につながった。

○専門的な指導により児童がより興味を持って学習に取り組めた。

●何を目的とした学習なのかをより明確にして、事前の打ち合わせを行った方がよかった。

概要

学校教育目標「学び合う子 やさしく かしこく たくましく」の中で、本校が一番大切にしている目標は「やさしく」である。やさしさを基盤とした人間関係を育むことで、児童一人一人が安心して自分の考えを主張し、友達の考えを聞きながら常に問い続ける姿勢をもつようになると考える。そして、自分には何ができるかを考え、行動に移していくことが可能となる。本校の実践の目的は、新たに授業を創造するのではなく、現在実践している授業に持続可能な社会の創り手を育てる ESD の視点を取り入れて、児童の行動変容につなげていくことである。

実践内容

1 学校教育目標と ESD を通して育成したい資質・能力とのつながり

学校教育目標の一つ「やさしく」を一番大切にし、そこを基盤として「かしこく」「たくましく」の目標を、児童が学び合いながら達成することが願いである。社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓くためには、目指す児童像「自分を大切にし、友達も大切にする」を育む過程で、児童が安心して様々な課題を自分事として捉え、他者の意見を聞きながら何ができるかを考え、行動につなげていくことが重要である。そのために、本校では今年度から学校研究を学級活動(1)の話し合い活動の授業実践として位置づけ、授業づくりを検討してきた。

2 SDGs 達成の担い手育成 (ESD) の視点で取り組んだこと

【学級活動(1)】

本校は明るく素直な児童が多く、言われたことは責任を持って取り組むが、人間関係づくりや自分の思いを他者に伝えることに課題がある。これまでコミュニケーション能力の育成を掲げて学校研究を継続してきたが、まだ足りない部分が多いと考えられる。そこで、「お互いの思いを伝え、認め合える子」を研究主題とし、学級活動(1)の話し合い活動の授業を研究してきた。

【ESD の視点の中から一つでも授業に位置付けることを意識する】

- ① つながりへの気づき→学校教育目標や提案理由に対するつながりなど
- ② 教科の視点につなげていく→社会、理科、道徳、総合的な学習の時間・生活科など
- ③ ジレンマを起こす問い→心配意見を解消するための問いや意見
- ④ 永続的な問い（ここが分からないから次にさらに調べたい）
→心配意見から折り合いをつけるまで
- ⑤ 児童の行動変容につなげていく。→事後の活動・見届け・評価

3 ESD による「変容の視覚化」の手法

【話し合い活動で決定した取組の見届けと行動変容】

自分の考えを伝え、友達の考えも聞きながら折り合いをつけていく話し合い活動は、「自分もよくて、みんなもよい」ことの意識付けを図るとともに、問題を自分の事として考え、行動することにもつながる。1年生は自分が描いた笑顔の絵を1枚の画用紙にまとめ、「こんなクラスにしたい」といつでも振り返ることができるよう掲示している。4年生は話し合い活動で出された賛成意見や心配意見を、写真とともに模造紙にまとめ、折り合いをつけて決定した取組やその後の様子（行動変容）をクラスに掲示し、いつでも振り返ることができるようにしている。



4 ESD によって引き出すことができた価値

児童が話し合い活動を通して身につけたことは、クラス全体の課題を自分事として捉え、どのように解決していけばよいか自分で考え、友達の考えを聞きながら、よりよい解決方法を自分たちで作りに上げていく姿勢である。この姿勢は、身近な課題や強いては地球的課題にも目を向け、当事者意識をもって自分やみんなが、何ができるかを主体的に考える力を身につけることができると考えられる。

目指す児童像「自分を大切にし、友達も大切にする」や学校教育目標の一つ「やさしく」に向けて、何よりも児童が毎日を笑顔で楽しく生活する姿が見られるようになったことが、一番の価値である。

成果と課題

- 全学年が、学校教育目標や目指す児童像と連鎖した「自分もよくて、みんなもよい」という意識が芽生え、実践できている。
- 当事者意識をもって、話し合い活動に参加する児童が少しずつ増えてきている。
- ESD の視点を取り入れた話し合い活動は、まだまだ始まったばかりである。SDGs とのつながりや関連付けての授業など、学校全体としての取組については、今後検討していく必要がある。

概要

本校の学校教育目標は「進んで学ぶ子 なかよくする子 明るく元気な子」である。また、目指す学校像として「人のために 教職員も子供も 笑顔で優しく 尊敬し合い（愛） 共に学び合う（愛）学校」と掲げている。これは教育の目標である「人格の完成」を目指し、学校の役割として子供の心身の発達に応じた教育を計画的に行うことを目指したものである。日々の教育実践の中で、新たに授業を想像するのではなく、現在実践している授業を持続可能な社会のつくり手を育てるE S Dの視点を取り入れて、児童の行動変容につなげていくことである。

実践内容

1 学校教育目標とE S Dを通して育成したい資質・能力とのつながり

目指す学校像の「教職員も子供も・・・共に学び合う」を受け、社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り開くためには、児童が安心して様々な課題を自分事として捉え、他者の意見を聞きながら何ができるかを考え、行動につなげていくことが重要である。

本校では主に総合的な時間の学習の中で、持続可能な取り組みを意識させ、授業づくりを検討してきた。

2 S D G s 達成の担い手の育成（E S D）の視点で取り組んだこと

【総合的な学習の時間・3年生】

学区調査を行う中で「トトロの森」と呼ばれる森が近くにあることを知り、「となりのトトロ」の舞台が所沢であることを知った。

（気づき）

「となりのトトロ」から「自然を大切にしたい」というメッセージを受け取り、「いきものふれあいの里センター」の方に来校していただき、出前授業をしていただいた。（情報収集）

得た情報（トトロの森が人の手によって大切にされていること）をもとに、いきもの府レイアの里センターの方の指導の下、実際に森を歩いてみた。（体験）

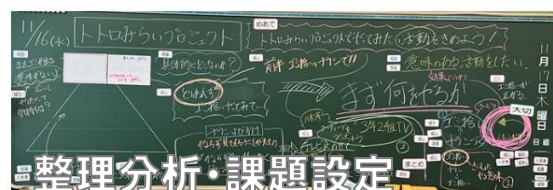
歩いてみて感じたことや、思ったことをもとに、トトロふるさと基金の方から「どのようにトトロの森ができたのか。どのように森を守っているのか」の話を聞いた。（情報収集）

活動（体験活動と情報収集）の振り返りを行い、整理・分析をした。今後の課題を決め、何をどのように取り組んでいくか見通しを立てた。（整理分析・課題設定）



3 E S Dによる「変容の視覚化」の手法

「トトロの森プロジェクト」のファイルを作成し、毎時の活動を記録した。また、全体での話し合い活動の板書を写真に撮り、いつでも振り返れるように掲示した。



4 E S Dによって引き出すことができた価値

「学区探検」だけで留まらず、「なぜ・何で」

という疑問から「気づき」の視点を得たことで、「自分たちにできることはないか」という意欲へとつながることができた。さらに、自分たちの活動を地域や他の人へ発信する考えも出てきている。

成果と課題

○今回の活動を通して、他教科でも「自分たちにできることはないか」という視点をもって学習に臨んでいる姿が見られるようになった。

○「誰に」「何を」「どのような方法で」発信していくか個人やグループで検討し、より適した発信方法を選択していこうとする力が芽生えた。

●教職員にE S Dへの意識やE S Dの視点が定着していないため、学校全体としての取組として広まっていけないのが課題である。

概要

学校教育目標「自律 貢献 共生」を掲げて、「生徒が主語になる学校づくり」を意識して、学び手である生徒と対話を重ね、今までの子ども観、教育観を更新しながら、現在の教育活動を計画、実践していくことが重要であると考え。現在の実践をE S Dの視点で見直し、行動変容につなげていく。

実践内容

1 学校教育目標とE S Dを通して育成したい資質・能力とのつながり

急速に変化する時代を強く生き抜くために①自分を大事にすること、②他者との繋がりの中で、よりよいものを見出したり生み出したりする力が求められている。本校の目指す学校像は「誰もが安心して過ごせる学校」、目指す生徒像は「自分で考え行動できる生徒」である。

E S Dとは現代社会の問題を自らの問題として主体的に捉え、人類が将来の世代に渡り恵み豊かな生活を確保できるよう、身近なところから取り組むことで、問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらす、持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動である。

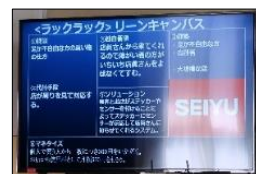
本校のさまざまな教育活動によって、生徒が目の前の身近な問題(課題)に向き合い解決する過程で自他を大切にすること、主体的に行動することを学び、E S Dにつながっていくと考える。たとえ、よい成果に繋がらなかったとしても、すぐに結果が出なかったとしても、自ら挑戦した経験は「できないと思うこと」を「できるようになるための一歩」だと学んでもらいたい。



2 S D G s 達成の担い手育成(E S D)の視点で取り組んだこと

【行事(起業ゼミ・校外学習・修学旅行・福祉学習等)】での学び

1学年では社会体験チャレンジとして、株式会社 Gaiax に協力していただき「起業ゼミ」を行った。中学生が考える身近な社会問題を解決するために、地域の方や企業等にインタビューし、課題の本質に迫り解決策を見出し、自分(グループ)の働きに価値を付け、プレゼンテーションを行うといった取組である。



1学年では富士山に出掛け、自然について自ら調べ、現地で学び、多くの学びを得る。理科の教科学習とも連携する。2学年では京都奈良についての調べ学習を行い、自分たちの修学旅行を創造することで、より主体的に学びを得る姿勢を育てる。ここでは社会科・英語科との連携も図る。その後、地元所沢の魅力を学び発信する活動を取り入れる予定である。

【日常の中での取組】

- ・古紙回収 BOX 設置、エコキャップ収集；ゴミを減らしリサイクルへ。
ゴミをゴミにしない活動
- ・対話型芸術鑑賞(朝鑑賞)；自分の意見や考えを表現する場の設定(直接 SDGs に結びつくものではないが、ゴールに迫るための必要な力の育成)

3 E S Dによる変容

目に見える生徒の行動変容はまだ多くない。ただ、学校行事を通して経験や失敗からも学ぶ姿勢は育っている。自分の意見を発信し、仲間の意見を取り入れ、問題の解決に向けてよりよい手段や方法を練り上げる、こういった姿勢が見られるようになった。

4 E S Dによって引き出すことができた価値

「共生社会の中で生きる私たち」という視点は、自他を認容する姿勢と行動につながった。主体的に行動すること、自分を生かし、他者と協力して行動することのよさが目向けられるようになった。

成果と課題

生徒が成功だけでなく、失敗からも学べるようになったことが成果である。生徒が様々な取り組みに対し、課題を捉え、目標を持って取り組めるようになった。身近なことから少しずつ視野を広げ、視点を明確にして物事を捉えていく、教科横断的な教育活動を行っていくことが今後の課題である。

概 要

本年度は、「普段行っている授業の中で「それがE S Dである」ということへの気付きや意識をどう高めて、広げていくためにはどうしたらよいか」をテーマに、「どの学年でどの教科のどの単元」がE S Dにつながるのかを洗い出した。また、E S Dに関する出前授業を行っている機関や施設についても調べまとめる活動を行った。

実践内容 ※単元名 (学年・教科・時期・関係機関等)

実践を行った取り組み (○)

- 流れる水の働き (小5・理科・10月・川の博物館) 出前授業
- トトロの森プロジェクト (小3・総合・通年・生き物ふれあいの里センター) 出前授業と校外学習
- おおたかの森を守る (小5・総合・通年・おおたかの森トラスト)
- ビオトープ (小5・総合・2学期～)
- 起業ゼミ (中1・総合・11月・株式会社 Gaiax) 中学生の社会体験チャレンジ
- 性教育 (中3・保健・12月・助産師) 体育館での講義
- 修学旅行に向けて (中2・総合・2学期) 調べ学習プレゼンテーション
- 銀の燭台等 (小5・道徳・通年) ジャムボードを使って自分の考えの変容を数値化
- 電気とわたしたちの暮らし (小6・理科・11月) 持続可能な社会についての話
- 登山家の野口健さんの清掃登山の話 (小6・道徳【環境保全・自然愛護】)
- エコキャップ回収 教室に古紙回収 BOX の設置



次年度以降への取り組み (●)

- 水産業のさかんな地域 (小5・社会・くら寿司の出前授業→未利用魚の活用)
- 柳瀬川をホテルでいっぱいにしてしようプロジェクト (小4・総合・柳瀬川最上流をきれいにする会)
- 障害者の助けとなる様々な装具や技術 (小5・総合・国立障害者リハビリテーションセンター学院) 出前授業による装具の説明、簡単な義指の作成など
- ヤングケアラーについての学習 (中2・総合・3学期・社会福祉協議会) 著名人に講演を依頼 ゲストを招いて講話・講義
- 学校と地域 学びの未来 ～全国の取組事例ピックアップ～今和泉小学校区地域学校協働活動(地域の中に学校, 学校の中に地域を!!) (小全・総合・通年・文部科学省)
※「企業等による教育プログラム」の紹介あり
- わたしのライフデザイン ～みらいとつなぐ～ (中3・総合 or 特活・日本生命)

成果と課題

- ◇E S Dの意識を持つと、普段何気なく行っている授業がE S Dにつながっていることが多いことに気づいた。児童生徒に一言添えるだけで、見方や考え方をより深いものにすることができ、学習を多面的にとらえることができるようになった。
- ◆チームのメンバーを含め、まだまだE S Dへの視点が不十分なこともあり、他の職員に伝えることができていない。
- ◆今回発見したE S Dへの取り組みをいち早く広め、地域や学校事情にあった取り組みを推進していくことが課題となっている。

概 要

本プロジェクトは、E S DやSDG sの視点で学校づくりや授業改善の必要性の意識を高め、「E S D通信」の発行を通して本会の趣旨を市内の教員に広めることを目的に活動してきた。具体的には、昨年度発行した「E S D通信」（西富小学校の取り組み）に続き、今年度は、山口小学校の取り組み、北秋津小学校の取り組み、宮前小学校の取り組み、向陽中学校の取り組みを発行し、市内全小中学校に配布した。また、「立ち読みE S D」として、SDG sの17のターゲットについて、わかりやすくまとめたサイトを検索しやすいように提示し、市内全小中学生のタブレットP Cで見るようにした。

実践内容

1 学校の取り組み紹介



北秋津小学校の取り組み

山口小学校の取り組み

宮前小学校の取り組み

2 「立ち読みE S D」の取り組み

SDG sの17のターゲットをよりわかりやすくするために、「立ち読みE S D」を通して県が制作したホームページを紹介した。P C上の動画で確認することができる。とともに、本単元の学習がE S DやSDG sとどのような関連があるのかを確認することも可能になる。



参考：SDGsジャーナル【SDGs支援機関】

令和4年度 所沢市ESD調査研究協議会 発行

成果と課題

○学校の特徴を生かした活動を紹介し広められたことは、とても効果的だったと考える。さらに多くの学校の実践を紹介できればと考える。

●教員の意識を高めるという点では、まだ道半ばである。I C Tの活用による実態調査を続けるとともに、E S D・SDG sの視点を意識した授業実践を積み重ねていくことが大切である。

所沢市立教育センター

〒359-1118 埼玉県所沢市けやき台 2-44-2

TEL:04-2923-2396 Fax : 04-2923-2395

E-mail : edc@tokorozawa-stm.ed.jp

[http : //www.tokorozawa-stm.ed.jp/](http://www.tokorozawa-stm.ed.jp/)